令和元年度
第４回大垣市高校生アメリカ合衆国
ビーバートン市、ユージーン市研修派遣

2019 年 10 月 10 日～10 月 18 日

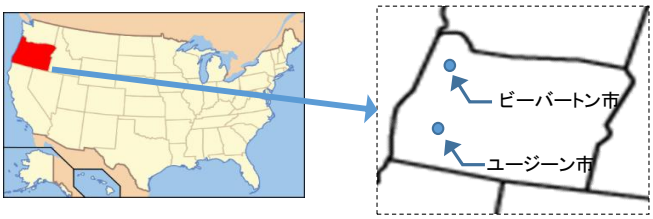
令和元年度フレンドリーシティ交流事業
第4回大垣市高校生アメリカ合衆国オレゴン州ビーバートン市、ユージーン市研修派遣事業
団員名簿（学年、五十音順）
派遣期間：令和元年10月10日（木）～10月18日（金）

No.	役名	氏　名	性別	学校名 役職名 もしくは 学年
1	団長	たかぎ　あきつぐ 高木　昭胤	男	(公財)大垣国際交流協会 事務局次長
2	総務	いわむら　あいこ 岩村　愛子	女	国際交流ボランティアグループWING　役員
3	総務	よしやす　みえ 吉安　三恵	女	(公財)大垣国際交流協会 職員
4	団員	おおの　あゆり 大野　安友梨	女	岐阜県立大垣北高等学校1年
5	団員	すぎの　さよ 杉野　紗世	女	岐阜県立大垣北高等学校1年
6	団員	くわばら　ももか 桑原　桃花	女	大垣日本大学高等学校2年
7	団員	こたけ　わかな 小竹　若菜	女	岐阜県立大垣北高等学校2年
8	団員	さわ　はるか 澤　はる香	女	岐阜県立大垣北高等学校2年
9	団員	たかぎ　ゆうな 高木　結那	女	岐阜県立大垣北高等学校2年
10	団員	たかはし　たくみ 髙橋　拓海	男	岐阜県立大垣北高等学校2年
11	団員	つるた　ゆうき 鶴田　勇貴	男	岐阜県立大垣北高等学校2年
12	団員	なかい　まや 中井　まや	女	大垣日本大学高等学校2年
13	団員	やまざき　みのり 山﨑　未朝	女	岐阜県立大垣東高等学校2年

令和元年度フレンドリーシティ交流事業

第4回大垣市高校生アメリカ合衆国オレゴン州 ビーバートン市、ユージーン市研修派遣団 日程表

派遣期間：　令和元年10月10日（木）～10月18日（金）［9日間］
派遣人数：　13人（高校生10人、引率者3人（団長1人、総務2人））

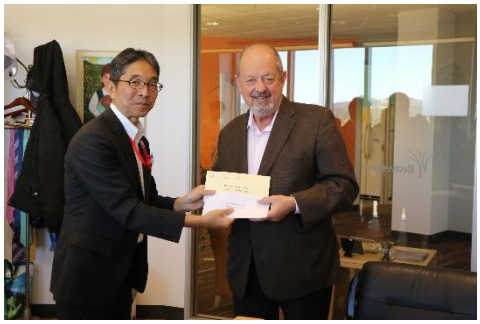


月日		現地時間	交通機関	日　　程	
1	10月10日 （木）	8:00 16:05 9:08 11:00-13:00 13:30-15:45	JR東海 新幹線のぞみ 成田EX デルタ航空 貸し切りバス ↓	大垣駅集合 8:30大垣駅発（JR東海道線）⇒ 9:07名古屋駅着 9:32名古屋駅発（新幹線のぞみ2号）⇒ 11:06品川駅着 11:25品川駅発（成田エクスプレス21号）⇒ 12:31成田空港駅着 成田国際空港発（ポートランド国際空港へ、DL68）〈飛行時間9:03〉 ----日付変更線----　（時差16時間） ポートランド国際空港着 ポートランド見学 ビーバートン市警察署、ビーバートン市役所 【ホテル泊①（ビーバートン）】	移動
2	10月11日 （金）	8:30 11:30 11:30-14:00 14:30-15:00 15:30-16:30 17:00	貸し切りバス ↓	≪ビーバートン市、ユージーン市≫ チェックアウト後、ユージーンへ向け出発 ユージーン市到着 オレゴン大学見学　［キャンパス見学］ ユージーン市表敬訪問 ユージーン市内散策 サウスユージーン高校にてホストファミリーと対面後、各家庭へ 【ホームステイ①（ユージーン）】	ユージーン
3	10月12日 （土）	終日		≪ユージーン市≫ 各ホストファミリーと1日過ごす 【ホームステイ②（ユージーン）】	
4	10月13日 （日）	終日		≪ユージーン市≫ 各ホストファミリーと1日過ごす 【ホームステイ③（ユージーン）】	
5	10月14日 （月）	8:30 終日 15:30		≪ユージーン市≫ ホストファミリー送りの送りで訪問先学校へ 高校訪問［ホストシスター、ホストブラザーの通う学校を訪問］ ◇ホストシスター、ホストブラザーと一緒に授業を受ける ホストシスター、ホストブラザーと一緒に帰宅 帰宅後ホストファミリーと過ごす 【ホームステイ④（ユージーン）】	
6	10月15日 （火）	8:30 終日 15:30		≪ユージーン市≫ ホストファミリー送りの送りで訪問先学校へ 高校訪問［チャーチル高校、シェルダン高校の2校に分かれる］ ◇日本語クラス参加(生徒との交流とプレゼンテーション) ホストファミリー迎え（各学校まで） 帰宅後ホストファミリーと過ごす 【ホームステイ⑤（ユージーン）】	
7	10月16日 （水）	7:30 10:00-13:00 14:00-17:00 18:30-20:00	貸し切りバス ↓	≪ビーバートン市及び周辺≫ サウスユージーン高校集合、ホストファミリーとお別れし出発 マルトノマの滝、ボンネビルダム ポートランド見学 アメリカの家庭でホームパーティー 【ホテル泊②（ビーバートン）】	ビーバートンと周辺
8	10月17日 （木）	8:00 8:45 11:14	デルタ航空	ホテルを出発し、空港へ ポートランド国際空港着 ポートランド国際空港発（成田国際空港へDL69）〈飛行時間11:11〉 【機内泊】	移動
9	10月18日 （金）	14:25 19:20	成田EX 新幹線のぞみ JR東海	成田国際空港着 15:14成田空港駅発（成田エクスプレス32号）⇒ 16:22品川駅着 16:54品川駅発（新幹線のぞみ391号）⇒ 18:28名古屋駅着 18:40名古屋駅発（JR東海道線）⇒ 19:16大垣駅着 JR大垣駅解散	

【国際交流を支えるひとと多様性を認め合える社会】

大垣国際交流協会　事務局次長　髙木　昭胤

アメリカ合衆国高校生研修派遣の引率が決まり、その後の事前研修を通じ一貫して胸の奥底にあった逡巡と不安は、ポートランド空港に着陸するとのアナウンスで目を覚まし、飛行機の窓から見えたオレゴン州の壮大で美しい自然、大きくゆったりと曲がりくねった川、朝日を浴びてキラキラと輝く露を湛えた葉を繁らす森林と草原よって雲散霧消してしまい、無事に帰ってこられた今となっては杞憂であったと思います。



研修中、団員はフレンドリーシティであるビーバートン市、ユージーン市への表敬訪問と両市長さんとの歓談（気さくな市長さんの矢継ぎ早の質問に団員はやや緊張気味？）、ホストシスター、ホストブラザーとの高校体験、日本語クラスでの郷土大垣、日本の高校生活の紹介など多彩なプログラムをこなしていましたが、私にとっても貴重な体験の連続でした。

その一つに、この研修を支えていただいている多くの人との出会いがありました。相互交流のホームステイ受入れに長年ご尽力くださっている小沢先生との度重なる懇談、大垣でオレゴン州からの学生受入れをしていただいている、WING の岩村さんから聞いた３０年の歩みとその出会いを縁にした当地でのティーパーティー。また、毎回滞在中に名所案内やホームパーティーを開いてくださる、かつて大垣を訪問された学生家族の方々の出会いと心温まる歓待を通して、おもてなしの文化は決して日本固有のものではなく、万国共通の心遣いなのだと感じ、長年継続された歴史が今回の研修に脈々とつながっていると実感しました。

近年の国際情勢は、ともすれば〇〇ファースト、自国優先主義、経済至上主義のような様相を呈し、協会が目指す「幅広い分野での国際的な交流、外国人市民とともに生きる地域社会づくり」とは対極をなし、我が国においても近隣諸国との国民的感情にわだかまりがあるように思えます。

だからこそ、国や人種、宗教や生活習慣、文化や価値観の違いを認め合い、多文化共生を担う人材を育てることに大きく寄与する学生等の相互受け入れは大きな意義を持っており実施されてきているのでしょう。

今日も協会で外国の人たちに日本語を教えていただいている、和服体験の着付けや茶道などの日本文化を指導していただいている、大垣に来られる訪問団のホームステイを受けていただいているなど多くのボランティアさんのマンパワーこそ、国際交流を通して、「バラバラでいっしょ」「みんな違ってみんないい」といえる多様性のある社会の醸成を支えている源、国際交流の礎、財産であると再確認した研修でした。

【オレゴンへの研修に参加して】

国際交流ボランティアグループ WING 役員　　岩村 愛子

この度、オレゴン州への高校生派遣事業に引率者の１人として参加させていただきました。
日頃は WING の活動にご支援を賜りありがとうございます。お陰様で WING の活動も今年で３０周年を迎えることができました。

今年は、この研修生の中から９名の生徒が WING の活動のメインであるオレゴン高校生受入れに、ホストファミリーとして１週間受けていただき、感謝の気持ちで一杯です。

さて、今度は日本からの高校生１０名がオレゴンへ行くことになり、再会できる喜びを胸に”英会話をたくさんしたい””もっといろんな人とつながりたい”と胸をふくらませながらオレゴンに到着。

フレンドリーとなったビーバートン市・ユージーン市の市長表敬訪問から始まり、警察署やオレゴン大学を訪問したり、市内散策の後いよいよ待ちに待ったホームステイが始まりました。
不安と期待でドキドキ・ワクワク。サウスユージーン高校でのマッチング。
オレゴンの生徒たちが “ Hi !! ○○さーん !!” と大きく手を振って近づいてきたとき、日本からの生徒たちの目が再会の喜びにキラキラと輝きました。
先ほどの不安感も吹き飛び、お互いに抱き合って再会を喜び合い、各家庭へと散らばり、私達もホッと一安心。今年６月の WING での高校生ホームステイ受入の活動に参加していたからこそ出来た光景でした。再会したことで友情が深まったのです。

今回で４回目となる派遣事業には、滞在中小沢先生(オレゴン州でのコーディネーター)や Warren さん(2016 年に日本に来てホームステイされた)、Jensen 家の家族(2015 年に日本に来てホームステイされた)といった方々に大変お世話になりました。
Jensen さんは、ハロウィーンパーティーに日本からの高校生全員を招待され、Warren さんは、土・日の休日に私達をユージーン市の案内をしていただく等、献身的なお世話をいただきました。

今までの WING の活動が花開き根付いていることを実感し、心から感謝した次第です。

今後も更にオレゴン州との友好関係を深めながら、この貴重な体験が生かされることを願っています。

私は初めての参加でしたが、今回の生徒たちは素晴らしいチームワークで、病気や事故も無く、全員が無事に帰って来られたことと、団の目標「全員で支え合いたくさんのことを学び経験し、思い出となる研修にしよう！」が達成されたことに感謝しています。

又、このような素晴らしい機会を与えて下さった関係者全ての皆様に感謝申し上げ、報告とさせていただきます。

ありがとうございました。

【研修を振り返って】

公益財団法人大垣国際交流協会　吉安　三恵

大垣より緯度が高いこともあり、すでに紅葉真っただ中のオレゴン。赤・黄・緑の美しい木々に迎えられ、オレゴンでの日々が始まりました。４回目の派遣事業で、私自身４回目の訪問。毎回新たな発見と感じることの多い派遣事業で、今年の訪問の中で、印象的なことを振り返りたいと思います。

まず、相互交流です。今回の派遣団員の多くは６月にオレゴンから大垣を訪問した高校生のホストファミリーとして、日本ですでにオレゴンとの交流に関わっていました。そして、７人の団員は自分が受入をした生徒の家庭に、今回ホームステイをしたのです。別の家庭に行ったメンバーもいましたが、オレゴンとの交流という点では、相互交流であり、誰もが約３か月間再会、そして大垣で聞いていたオレゴンを自分の目で見て、聞いて、感じてくることをとても楽しみにしていたと思います。実際にオレゴンでの交流を通して、オレゴンがますます身近になり、生涯の友にも出会えたのではないかと思うほど、相互交流の成果があったように感じます。それは、「また絶対に会いに行きたい」という生徒の言葉から、そして涙のお別れの様子から感じました。言葉、文化、背景が違っても、心は通じあうものだと心から思います。

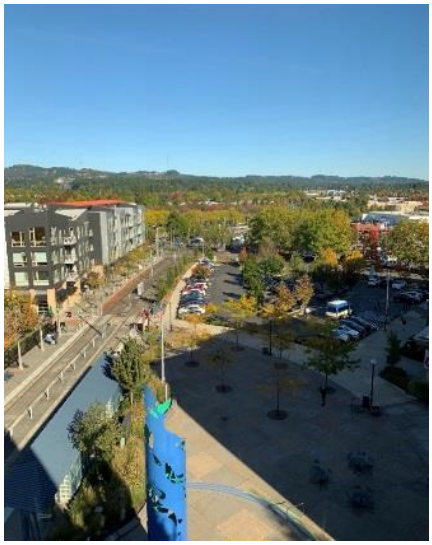
そして、多様な文化、考え方が共存している社会です。団員の高校生は、アメリカの高校生は自分たちより自由があっていいな、ということを思っていました。例えば、昼食を学内で食べる、外に食べに行く、授業科目の選択は、日本の大学のように自らでスケジュールを決める、通学方法に至っては、自分で運転、家族の送迎、徒歩などです。しかし、それは反面、自らの責任において決定しなければいけないということです。それぞれの考え方を尊重する多様性の国アメリカ。将来の進む道を考える岐路に立っている高校生にとって、オレゴンで触れた多様な文化、出会った人々の考え方や物の見方、そしてそれぞれ体験し感じたことは、必ず将来の糧になると感じています。そして、近い将来グローバルな世界で活躍する姿を楽しみにしています。

人と人とのつながりも再度認識したことの一つです。こうして、交流を継続できているのも、そして温かく迎えていただけるのも、今まで交流に関わってきた人の成果であり、つながりでもあります。そして、この人と人の交流、地域と地域の交流を繋げていきたいと思ったエピソードがあります。オレゴン州には、たくさんのワイナリーがあり、おいしいワインを造っているとお聞きし、「日本ではオレゴンのワインを飲む機会はなかなかない」という話から、毎回オレゴンでお世話になっている人と「『大垣・オレゴン・ワイン会社』を一緒に立ち上げよう」という冗談半分、少し本気の話をしていたのですが、こうやってオレゴンと大垣との交流に関わるようになり、何か両方の地域に貢献できることがないか模索していくことが、交流に携わらせてもらった宿命のようにも感じています。これこそ、一人の力ではできませんが、この交流を通して出会った人々との縁から何か始まるような予感がしています。

最後に、10 人の団員のみなさん、様々な経験を通して心身ともに成長されたと思います。この経験から感じたことを大切に、これからの人生の岐路に立った時々に思い出してほしいと思います。ビーバートン市、ユージーン市の皆様、コーディネートしてくださった小沢先生はじめ、お世話になった皆様に、心より感謝申し上げます。

【ビーバートン市】

大垣日本大学高等学校２年　中井　まや



私達がアメリカに初めて訪れた都市がビーバートン市です。ビーバートン市はアメリカ合衆国の西海岸に位置するオレゴン州の都市です。日本の気候に比べてとても涼しく、私達が訪れた 10 月は、日本の 11 月中旬ぐらいの気温でした。アメリカで一番初めに訪れた都市ということで、私達団員はとてもワクワクしたし、日本との違いに驚き感動の連続でした。

ビーバートン市は商業都市として有名で、NIKE の本社や IT 企業関連の会社が多く立地しています。

初めに訪問したのは警察署です。警察署を案内してくださった警察官のラムさんは日本語がとても上手で、難しい内容についても日本語で分かりやすく説明してくれたので私達も理解できました。普段なかなか見ることの出来ない物を見させてもらったり、警察犬と触れ合ったりしました。例えば、警察署の簡易的な牢屋に入らせてもらいました。そこはとても狭く、寒かったです。また、実際に手錠をかけられてパトカーに乗せられました。私が思っていたよりも椅子が硬く、ラムさんに理由を聞くと、犯罪者は血がついていて汚れていることもあり、掃除をしやすいように硬いプラスチック素材の椅子になっているそうです。また、ラムさんはとても重い防弾ジョッキを装着したり、みぞおちのあたり常にカメラを付け、いつ事件が起こったとしても、録画したものを証拠として提示できるようにしていました。警察署ではその他にも銃を見せてもらったり、警察犬の訓練の様子を見せてもらったりと普段できない貴重な体験をさせて頂きました。

次にビーバートン市役所を訪問しました。市役所ではデニー・ドイル市長が温かく迎え入れてくれました。市長はオバマ前大統領と面識があるようで２人で撮った写真を、市長室に大切に飾っていました。また、高木団長が小川敏市長から預かった手紙と、日本からのプレゼントを渡した時にはとても嬉しそうにしてくれて、見ている私達まで嬉しくなりました。ビーバートン市についても詳しく紹介してもらいました。市議会場へも連れて行ってくれ、皆で実際の会議のように座り、会議の疑似体験をすることができました。

ビーバートン市では私達がなかなか体験することが出来ないことをたくさん体験し、たくさん学ぶことができました。日本や大垣市との違いをビーバートン市と比較し、ビーバートン市の良いところを取り入れていけたらいいと思います。

【ユージーン市】

大垣日本大学高等学校２年　桑原　桃花

私たち派遣団は、アメリカに着いてから２日目にユージーン市を訪れました。街中を散策したり、街並みを写真に収めたりしました。ユージーンの街並みは、自然が豊かながらも、アメリカらしさがたくさん表れているものでした。監視カメラの近くに看板があり、「SMILE!」と記してあったのは日本と違っていて、とても面白いと感じました。私が特に心惹かれたものは、「ウォールアート」です。ユージーンの街中には、アートが施されている壁がたくさんありました。どれも手が込んでいて感動しました。また、ユージーン市の市役所にも伺いました。市役所の雰囲気はとてもお洒落で、市役所にみえないくらい、とても素敵な場所でした。ユージーン市の市長は女性で、とても親切な方でした。ユージーン市の歴史、現在の状況やこれから目指していく理想像などについて話してくださいました。私も、自分たちの住んでいる地域について、良いところや改善点など、考えてみようと思いました。また、市長さんがお話してくださっているのを見て、働く女性はなんてかっこいいのだろうと思いました。私も将来、たくさんの人の役に立てる働く女性になろうと決心しました。

そして、オレゴン大学を訪れました。キャンパス内は自然がたくさんあり、スポーツができそうな場所や遊び場のようなところまでありました。大学の中には広い図書館やきれいなカフェテリアなどがあり、楽しい大学生活を送ることができそうだなとも思いました。また、オレゴン大学はドナルドダックがイメージキャラクターとなっており、大学のいたるところで見つけることができました。たくさんの生徒が自身の学校のエンブレムやロゴの入ったＴシャツやパーカーなどを着ていました。これは日本との大きな違いだと感じました。日本では見ることのできない光景で、オレゴンのイメージカラーの緑の服に身を包んだ学生がたくさんいて、統一感があって素敵だなと思いました。

日本でも大学といえば自由なイメージがありますが、それをはるかに超えて自由な場所でした。でも、自分の好きなことをやりつつも、しっかりとやることはやる。これがアメリカンスタイルなのかなと思いました。

ユージーン市を訪れて、日本と違う点をたくさん見つけることができてとても面白かったです。アメリカで見聞きして、いいなと感じた部分を日本の文化にも取り込んでいけたらいいなと思いました。

【チャーチル高校】

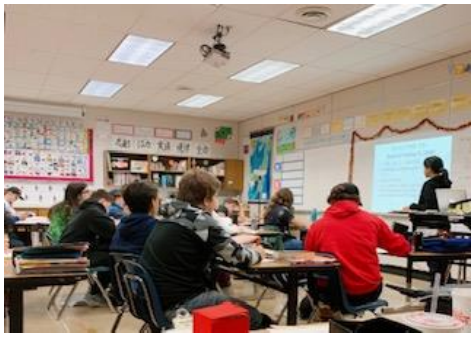
岐阜県立大垣北高等学校１年　杉野　紗世

高校訪問の１日目、私はホストシスターの Keilani が通うチャーチル高校に行った。その２日前にチャーチル高校で行われた「Home Coming」というダンスパーティーに連れていってもらったため、アメリカの高校と日本の高校の違いをすでに肌で感じていた。が、実際にアメリカの高校生活を体験してみると新たな驚きや発見が次々に出てきた。

学校へは Keilani の兄の運転で行った。彼は日本でいう高校２年生だ。高校生でも自動車免許が取得できるアメリカでは、自分で運転して学校に来る生徒が多いらしい。日本では考えられないことでなんだかかっこいいと思った。

１限目が始まるまで Keilani が学校を案内してくれた。アメリカの高校には日本の〇年〇組のように決まった教室がなく、教科担任の待つ教室まで生徒が移動する。そのため、教室数が多く最初は覚えるのが大変だったと Keilani が話してくれた。教科別に棟が分かれている点は日本と同じだと思った。生徒たちは授業までの時間は、クラブ活動をしたり図書室で本を読んだり廊下でメイクをしたりと、とても自由に過ごしていた。

そして１限目の英語の授業が始まると、私はチャーチル高校に来てから最大の衝撃を受けた。授業中の生徒たちの行動が自由過ぎたからだ。お菓子を食べている人、スマホを触っている人、イヤホンを付けて音楽を聴いている人など様々な人がいた。もちろん普通に授業を受けている生徒もいたがあまりにも普段目にしない光景であるがために、そのことばかりが記憶としてよみがえってくる。先生も特に気にしていなく、注意していない様子だった。しかし決して授業をさぼっている様子はなかった。自由の国と呼ばれるアメリカだからこそ、そのような状況でも授業が成立しているのだと思った。みんな、１人１台与えられたパソコンを使って自分に合ったペースで学習していた。



２限目の物理、３限目の歴史が終わった後、日本語クラスの生徒たちと一緒に昼ご飯を食べた。その日の昼ご飯は、ホストファザーに届けてもらった KFC のチキンセットだった。アメリカの高校生はみんなカフェテリアで食事をするのだと思っていたが、家から持ってくる人や学校の外へ出て買ったり食べたりする子も多かった。食事中もたくさんの生徒が話しかけてくれて、英語での会話を楽しむことができた。

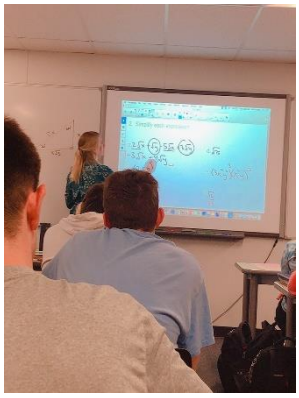
午後からの４限目、５限目は日本語クラスの授業だった。知識の差はあるもののみんな熱心に授業を受けていてなんだか嬉しかった。積極的に多言語を学ぼうとする姿勢は私たちが見習うべきものだと思った。

この１日で日本との違いを発見するだけでなく、素敵なアメリカの人たちの一面を知れて本当によかった。特に自分から積極的に学ぶという姿勢をこれから大切にしたいと強く思った。

【シェルダン高校】

岐阜県立大垣北高等学校２年　澤　はる香

シェルダン高校は公立高校であり、またアメリカの高校は４年制なので生徒数がとても多かった。そうだとしても、建物は平屋建てで、敷地が広すぎると感じた。私の高校の３倍の広さはあると思う。グラウンドはサッカー用、野球用、ラグビー用などそれぞれのスポーツに合わせて別々に用意されており、環境がとても整っていて、羨ましかった。またアメリカは日本とは違い、シーズンに合わせてスポーツ、クラブ活動を変えるそうで一年で３・４個の種類のクラブ活動ができるそうで、とても楽しそうだと思った。毎時間、生徒は自分がとっている教科の先生の教室に移動するのだが、授業と授業の隙間時間は５分しかなく、私にとって広い校舎を移動するのはとても大変だったがホストシスターは「ちょうどいい」と言っていたのですごいと思った。服装は自由であり、授業中に帽子をかぶっている人や、ドーナッツを食べる人、立ち歩いて移動する人を見るのは新鮮だった。最初は驚いたけど、さすが自由の国アメリカだと感じた。また授業の科目選択も基本は生徒ができるそうで、各個人にあった自分がしたい、興味のある勉強ができるのはとても良いシステムだと感じた。特に驚いたことは毎時間、それぞれの教科で日本と変わらない多くの量の宿題が出されるということだ。しかしホストシスターに聞いたところ、宿題をやるかやらないかも自分次第だそうで、日本のように強制はされない。自由な分、責任も自分にあるのだと感じた。



教科書はなく、プロジェクターやプリント、ipad を使った授業が多く、日本よりも教育の環境が良いと感じたし、効率的だと感じた。私のホストシスターは高いレベルの授業を選択していたということもあったが、授業の質の高さに驚いた。特に４時間目のデイベートの時間では、難しい社会問題について事前に自分で調べ、自分の主張を要約しておいたうえで、相手の意見に合わせ自分の情報を処理し、主張するという姿に圧倒された。日本でも、テストで使う教科ばかりだけでなく、もっと自分自身で自分たちの社会を考える授業、時間を増やすべきだと感じた。また自分から積極的に意見を言う人が非常に多く、日本人は積極性が足りないように感じた。アメリカの高校で一日過ごすことで、生徒たちの活気に満ちた姿や自由な校風をたくさん感じることができた。そして同時に日本の高校の良さ、改善できるところに気付くことができ、本当に良い機会になった。

【サウスユージーン高校】

岐阜県立大垣北高等学校２年　小竹　若菜

16 歳のホストシスターが通うサウスユージーン高校。始業は 8:30。日本のように朝のリスニングや、ホームルームがあるわけではなく、１限目の授業から慌ただしい１日がスタートする。遅刻をしてくる生徒も数人いたが、日常の事のようで教師も特に気にかけない。私がまず驚いたのは、タイムスケジュールの微妙さである。壁に掲示されている表を見ると、Regular と Fridays の２種類があるようで、そのうちの Regular の方の時間割が変わっていた。8:30 から始まる１限目は 9：42 に終わり、次の２限目は１限終了７分後の 9:49 から始まる、といった微妙な時間割になっていた。ただでさえ、アメリカの高校は日本の高校と比べて横に広く、教室によってはかなり急がなければ次の授業に間に合わないのに、それに加えて休み時間は日本の高校よりも短いのだから、どの生徒も足早に次の授業場所に移動していた。また、ランチタイムも約 40 分と短く、移動する時間を惜しんで廊下で昼食をとる生徒も多かった。こんな食べ方をしていたらさぞ廊下は汚くなるだろうと思ったが、janitor と呼ばれる清掃員によってきれいに掃除されているため、特に汚いとは感じなかった。次に驚いたのは、「トイレパス」が存在することである。授業中に Rest room に行きたくなった生徒は何も言わずに立ち上がり、紙にサインしてパスをもって教室を出ていく。そして、戻ってきたらそのパスを返すのだ。日本には黙って教室を出ていったら叱られるしそのような制度もないため、学校の制度の違いにも驚かされた。

２限の日本語の授業では、あつこ先生が私を特別ゲストとして迎え入れ、楽しいアクティビティに参加させてくれた。日本語クラスの生徒は本当に日本の事が大好きで、熱心に勉強していた。彼らが私に投げかける質問は様々で、改めて、私自身ももっと日本について知っておく必要があると感じた。

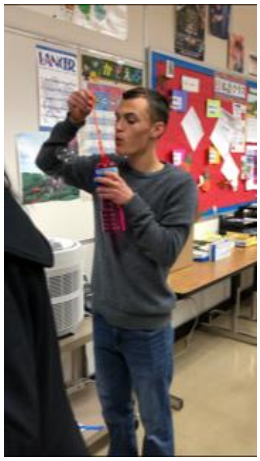
私のホストシスターは５限の Study Hall という授業の時に、許可を取って私に学校を案内してくれた。休み時間とは対照的に静まり返った廊下で、お互いの進路や大学入試制度の話をしながらあることが気になった。廊下に設置されているロッカーの上に’Sophomore’という文字を見つけ、見慣れない単語だったのでどういう意味なのかを聞いてみた。これも、新たな発見だった。アメリカでは、４年を一団として見たとき、１年生のことを Freshmen、２年生は Sophomore、３年生は Junior、4 年生は Senior と呼ぶそうだ。つまり、高校１年生は高校の Freshmen、大学１年生は大学の Freshmen である。学年それぞれに日本とは異なる名前が付けられていることも面白いと思った。ホストシスターによるスクールツアーはサプライズの連続だった。アートクラス専攻の生徒による立派すぎる壁画。ドラマクラス専攻の生徒による映画の告知。学校の中に広がるアウトドアクラスの緑の基地。体育館とは別に存在する本格的なトレーニングジム。高校内に設置された幼保園。図書室の一角を占める日本の漫画コーナー。生徒一人ひとりのカリキュラムと成績を管理する現代的システム。…など、どこを見ても目新しいものばかりで楽しい探検だった。

私はアメリカは初めてではなかったし現地の学校にも行ったことがあったが、公立の高校は今回が初めてだった。今まで知らなかった学校制度や校風に触れ、多種多様な生徒たちと共に充実した１日を過ごすことができて本当に良かった。この高校での貴重な経験により、私のこれまでの価値観、ものの見方が確実に変わった。

【チャーチル高校　日本語クラス】

岐阜県立大垣北高等学校１年　大野　安友梨

私達はチャーチル高校の日本語クラスで大垣、日本のことについてプレゼンテーションをした。ほとんどのクラスでは英語で行ったが、上級クラスでは日本語だけでプレゼンテーションをした。



高校を訪問する前に、ホストシスターが日本の学校はアメリカと違ってとても静かだと話してくれた。実際アメリカの学校を訪れてみると、生徒が授業に活発に参加していて先生と生徒で授業を作り上げている感じだった。授業は聞くよりも話す方が多く日本語クラスの人たちはみんな上手に日本語を話していた。日本の学校ももっと話す活動を増やせばいいのにと、この学校を訪れて感じた。日本の学校とは雰囲気も活動内容も違い、全ての活動が新鮮で楽しかった。

また、アメリカの学校はとても自由だった。服装もそうだがお菓子を食べたり携帯を触ったりシャボン玉をしたり、日本の学校ではありえないことがたくさんあった。校内には生徒によって描かれたカラフルなウォールアートがあった。

プレゼンテーションでは、クラスの文化祭の出し物について話をしたところ、とても興味を持ってくれたので動画を加えるなどの工夫をした。また、１つの話題が終わると質問をされたが、5人で協力し答えることが出来た。アメリカの生徒たちは特に日本の固定教室（ホームルーム）での授業のことや自分たちで校内の掃除をすることに興味津々だった。掃除を生徒がするか、しないかどっちがいいか聞くと全員、生徒がする方がいいと言っていた。アメリカには、学校を自分たちで掃除する習慣がないので、あちらこちらにゴミが落ちているのを見かけた。それに対し日本には掃除の習慣があるので、より学習しやすい環境を作ることができる。このことについて現地の生徒は、日本の掃除の習慣を素敵な文化だと言ってくれた。私も改めて日本の掃除習慣の良さに気づかされた。面倒くさいと言う人がいると思ったので、とても意外だった。上級クラスの生徒になると反応がとても大きく、また回を重ねるうちに私たちも慣れてきて私たちのプレゼンテーションでアメリカスタイルの授業のような雰囲気が作れた気がした。

プレゼンテーションの後には生徒同士の交流タイムがあり、日本の高校生活について日本語で質問をしてくれた。私は同じグループになった子に年齢を聞いてみた。すると 14 歳～17 歳までの子がいて驚いた。年齢が違うのにみんな仲良しだった。

チャーチル高校を訪れて現地の高校生に積極的に話しかけたことで、沢山のことを話し、聞くことが出来た。また、この１日で日本では知ることのできない多くのことを学べた。この経験は将来色々な挑戦をしていくうえで大きな自信になると思う。

【シェルダン高校でのプレゼンテーション】

岐阜県立大垣東高等学校２年　山﨑　未朝

シェルダン高校では、日本語１年生クラスで１回、２年生のクラスで２回、３年生クラスで１回プレゼンを行った。どのクラスの生徒たちも、私たちの話す内容を興味深そうに聞いており、改めて日本とオレゴンの繋がりを感じることが出来た。シェルダン高校の日本語教室には日本の地図やジブリ映画のキャラクター、日本の人形などが飾られていた。また日本語クラスの生徒たちは全員、英語の名前とは別に日本語の名前を持っていた。日本では英語のクラスで日本語の名前とは別に英語の名前を決めることはしないので、教育の仕方に違いを感じ、興味深いと感じた。

自己紹介やプレゼンで話したことを生徒たちはメモを取りながら真剣に聞き、何度も反応や相槌を打っていたり、プレゼンが終わった後に質問をしたり感想を伝える姿を見た。日本では質問したり感想を伝える機会があってもあまり積極的に質問したり感想を伝えるイメージがないのでそこに日本との国民性の違いを感じた。また、日本語で質問したり、私たちが英語の質問を理解できなかった時により簡単な英語で伝えたりしようとしてくれた。質問の時間にはプレゼンの中で紹介した学校行事や制服、文化など身近なことについて交流した。特に学校行事では文化祭、体育祭などアメリカにはない行事にとても興味を持っており、「体験してみたい」と言っていた。

授業の終盤にはオレゴンの生徒数名と大垣のメンバー１人が１つのグループになり、日本語と英語を使って交流した。生徒たちの好きな日本のアニメや日本食、日本とアメリカの違いについて話をした。母国語が日本語でない人とどのように伝えたいことを伝えるのかや、私が分からない英語があったときにどのように対処するかなど、言語や文化が違う人たちとのコミュニーケーションの取り方を学ぶことができた。

通常の海外旅行では、高校を訪問し現地の高校生と交流することはほとんどない。そのため今回のシェルダン高校訪問は、私たち日本の高校生にとって大変貴重な経験となった。オレゴンの高校生と関わり、英語だけでなく日本語やその他のことも沢山学ぶことが出来た実りのある１日になった。

【ポートランド・ホームパーティー】

岐阜県立大垣北高等学校　２年　鶴田　勇貴

ポートランドは、近くには日本の富士山を連想させる、雪を頂くマウントフッドがそびえている、オレゴン州で最も大きな都市です。

ポートランドではダウンタウンに行きました。とにかくどの建物もきれいで高く、いわゆる都会でした。しかし、日本と大きく異なり、あちらこちらに多くのオレンジ色の自転車があったことが印象的でした。「BIKETOWN」と呼ばれるサービスで、環境を守るために、温室効果ガスを排出しない交通手段として、大変安価で自転車が借りられるものでした。環境への意識が日本より強く見られ、見習うべき姿がありました。

また、特に印象に残っていることは、オレゴン大学のアメリカンフットボールチームである「オレゴンダックス」の緑のパーカー等を着ている人がとても多く、日本では胸に「大垣」と書いてあるようなものであるなと考えると自分は着ることができないなと思い、日本の感覚とは異なり、アメリカ人の地元愛の強さを感じました。

世界最大級の本屋である、「POWELLS BOOKS」にも行きました。図書館以上の本屋という印象を受け、百万冊以上の蔵書に、圧倒されました。英語が全く読めず大変悔しかったです。将来すらすら読めるようになってリベンジしたいです。

この日の夜には、ホームパーティーに参加させていただきました。ハロウィーンが迫っていて、ハロウィーンの装飾であふれていました。とくに、手を洗うハンドソープの容器まで、パンプキンが載っていてビックリし、細かな徹底ぶりに感激しました。食事もたくさんの種類があり好きなものをとることができ楽しかったです。スイーツにはかわいいものばかりで食べることがもったいないくらいでした。日本には友達の家に大人数集まってパーティーする習慣はないことだと思うので、アメリカの文化にあこがれも感じました。

今回の研修から、道などを歩いていても、日本では外国の方は特別に扱うようなことがあると思いますが、アメリカでは多様性に非常に富んでいて日本人の私も自然と溶け込んでいるような感じがしました。多文化に実際に触れてみて気が付かされることの多さ、そこから見える日本の良さもたくさん感じました。今回学んだことを存分に今後に生かし、将来の夢につなげていきたいです。

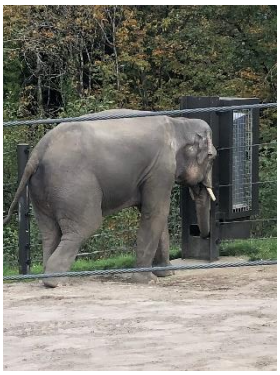
【オレゴンの自然】

岐阜県立大垣北高等学校２年　高木　結那

オレゴンはとても自然豊かな場所で、町の中にはたくさんの自然があふれていた。

１つ目に、オレゴン州の中でもっとも高い滝であり、落差 189 メートルあると言われているマルトノマの滝だ。マルトノマの滝では、散策道を通って、とても近くで見ることができた。天候が悪い中でもたくさんの観光客が訪れていて、オレゴンでも人気のある場所のようだった。高い位置から流れる滝は迫力があり、とてもきれいだった。滝の周りにはたくさんの木々があり、オレゴンの自然豊かな風景を楽しむことができた。

２つ目に、ボンネビルのダムだ。このダムは、コロンビア川に架かるダムでは、施設内の水中窓から泳いで移動する魚を鑑賞することができた。天然のサケやニジマスがダムを通過して産卵のために遡上できるように作られた仕組みであった。日本ではあまり見ない施設であり、とても興味深かった。ダムはとても大きく、そしてとても広くて、水力発電としてアメリカ西海岸地域のたくさんの場所へ電力を供給している大きな力を感じることができた。



３つ目はオレゴン動物園だ。オレゴン動物園には 215 種 2,697 頭の動物がおり、日本では考えられないような近さで多種多様な動物たちと対面することができた。また、園内は約 26 ヘクタールあり、広大で、動物園とは思えない大自然の中で、かなり自然に近い状態で飼育されている、今までに見たことの無い種類の動物たちを見ることができた。日本とは桁違いのスケールにとても驚いた。

４つ目は街中にある公園とバラ園だ。そこはとても広い公園で、園内には遊具があったり、ウォーキングコースがあったりと、子供からお年寄りまで、たくさんの人に親しまれている自然豊かな公園だ。園内では野生のリスやアヒル、大きな川やたくさんの木々など、日本では見ることのできない大自然に圧倒された。また、バラ園は、公園内にあり、たくさんの種類の綺麗なバラを楽しむことができた。

オレゴンの滞在中には、たくさんの自然を感じ、日本では見ることのできない多くの美しい景色を見ることができ、思い出に残る良い経験となった。

【アメリカの生活環境と文化について】

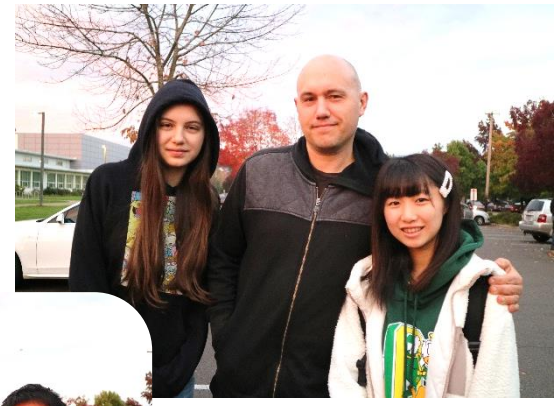
岐阜県立大垣北高等学校２年　髙橋　拓海

今回の研修で多くのアメリカの生活環境と文化の特徴を発見することが出来た。まずは気候や季節である。私たちが研修に出発したのは10 月の上旬で日本はまだ少し暖かく紅葉も始まっていなかった。しかし、アメリカは最低気温が７度の時もあり日本に比べて寒く、街の木々はすでに紅葉が始まっていてすごくきれいな景色が見られた。オレゴン州の町々で見られる木々は主に一種類で、いたるところにあり赤や黄色などすごく鮮やかだった。

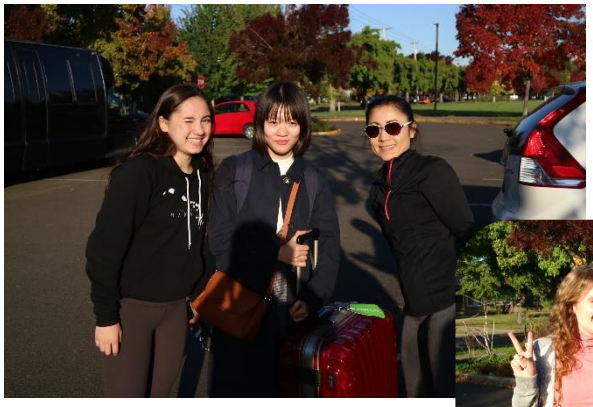
次は街の風景である。アメリカの道路は日本に比べて幅が広く、信号が立て向きだった。州の中心の栄えたところでは路面電車が走っていたり、歩道では乗り捨てが出来るキックボードや自分のスケートボードで移動したりする人がみられた。独特な外見をしたオブジェもたくさんあり芸術的な一面もあった。中心から少し外れた住宅街では道路が蛇行したくさん坂があり独特な家の並びが印象的だった。日本では見られないような背の高い木の森があったり、リスや七面鳥が道路を横切る様子があったりと日本との大きな違いを感じることが出来た。

３つ目は家についてで、今回の研修で３つの家を訪れたがどの家も１階が広く大人数が集まれる広いスペースやたくさんの部屋が見られた。日本の家よりも広く感じられ過ごしやすかった。また、アメリカの家は中でも土足で過ごすと思っていたが、意外とそういうわけでもなく靴を履かない人も見られたし、日本と同じように靴を脱がないと家に入れない家もあり家庭ごとでの違うルールに少し戸惑った。今回の研修はちょうどハロウィンに近い時期だったため多くの家が家の装飾をしていた。とても手の込んだ装飾を

毎年やっているそうで日本では感じられない楽しそうな雰囲気だった。家の敷地もとても広く、大きい車を何台もとめていた。アメリカは高校生から車を運転することが出来るので一家に車が３台はあったとおもわれる。最後はアメリカ人の性格である。アメリカは多民族の国でいろんな人種が見られるためかどこを訪れても異国の私たちをすぐに受け入れてくれた。日本人は外国の人に消極的に接するイメージがあるが、アメリカ人はすごく積極的で私たちにすごく興味を持ってくれたのでコミュニケーションがとりやすく、とても助かったと感じる。積極性があふれる性格はほかの場面でも見られた。例えば、高校の体育のフットサルの授業では男女に関係なくほとんどの生徒がボールに全力で向かっていたし、スポーツ観戦の時もスタンドからの声が鳴りやまず日本よりも随分にぎやかに感じた。豪快な性格の他にアメリカの人達はどの人もすごく優しく、気配り上手だと思った。日本人のように譲り合う一面も生活の多くの場面でみられ驚いた。アメリカの生活や文化、アメリカ人の性格は日本と大きく異なっていたが日本とは違った良さがありとても過ごしやすかった。



ホームステイの思い出



【ホームステイ】

岐阜県立大垣北高等学校１年　大野　安友梨

私のホームステイ先はジェフリーさん宅で、同い年の女の子、彼女の姉が２人、兄が１人、両親、猫が２匹の家庭だった。日本で受け入れた子とは違う子の家だったが事前に連絡を取っていたのと、今回は２回目の海外ホームステイということで緊張より楽しみな気持ちが大きかった。ホストファミリーは笑顔で私を迎え入れてくれて、家に帰るまでの道で沢山のことを話せた。ホストシスターが日本語クラスへ行っているのでホストシスターが日本語を話し、私が英語を話すという不思議な会話をしていた。

週末にはユージーンの自然やショッピングを楽しんだ。朝からパンケーキを食べて元気を出してから、車に乗って山の中に入った。広大な土地にまっすぐ上に伸びた木がたくさんあって獣道のような道を進んでいった先に滝があった。行くまではとてもハードだったけど、すれ違う人たちとおしゃべりをするのがとても楽しかった。岐阜も自然に囲まれているが比べ物にならないくらいの規模と、野生の動物も多く、全身で自然を堪能できた。その後は海へ行き、海沿いのお店を何件か回った。全てのお店にキャンディとファッジ(キャンディの一種)がおいてあり、ホストファザーは何個も買っていて、アメリカ人は本当に甘いものが好きなんだなと思った。

別の日にはサタデーマーケットや地元で人気のドーナツ屋さんへ行った。アメリカの食べ物はどれもチョコレートと砂糖が大量で日本のスイーツとはレベルが違うように感じた。また、食べ物はとても大きく、１人前を頼んでも４人前ぐらいの大きさで出てきて驚いた。でもほとんどのお店で箱がもらえ、お持ち帰りができたし、ショッピングバッグは紙袋で日本よりもエコの意識が進んでいると思った。

私が一番驚いたことは、運転免許についてだ。夜の 10 時くらいに「遊びにいく？」と誘われてホストシスターの友達が運転する車で遊びに行った。16 歳から運転することができる為、子供だけで遊びに行くことが出来る。日本ではなかなかできないことなのでとてもわくわくした。友達は日本のことについて沢山質問をしてくれて学校のことや車のことの違いで盛り上がり知らないことだらけで私も友達も驚いた。この時、この研修で一番重要な、お互いの文化をより知るということができた。

今回、この研修で現地に入り込むことでしか得られない発見や学びが沢山あった。研修に参加して素敵な思い出ができたことを家族や一緒に行けた友達に感謝し、これから英語力をもっと高めていきたいと思った。そして、いつかオレゴンに行ってアメリカの家族や友達にもう一度会いたい。

【ホームステイ・学び】

岐阜県立大垣北高等学校１年　杉野　紗世

長いようで短かった８日間。初めて訪れた海外の地がアメリカのオレゴン州で、初めてのホストファミリーが Keilani の家でよかったと心の底から思える研修になった。

ホストシスターの Keilani は５人兄弟で、ホストファザーが昔、２年間大垣に住んでいたりホストマザーがよく日本料理を作ったりと、家族全員が日本に興味がある家庭にホームステイした。ホストファザーは子どもたちに、もっとゆっくり話すようにしなさい、と言って私が英語での会話を楽しめるように工夫してくれた。話しやすい雰囲気を作ってくれたおかげで頼みたいことや伝えたいことがある時に遠慮せず、本当の家族のように接することができた。また、せっかくアメリカに来たのだから、と、私にたくさんのものを買ってくれた。日本と方法は違うかもしれないが、『おもてなしの心』のようなものを感じた。

ホームステイの初日からホストファミリーは私をいろいろなところへ連れて行ってくれた。ホームステイ２日目の夜にある Home Coming というダンスパーティーで着るドレスと靴を私の分まで買ってくれた時は本当に驚いたし、本当の子ども達と同じようにしてくれて嬉しかった。

週末には私の行きたいところを踏まえて予定を立ててくれた。

ショッピングモールや釣りをしに行った川、ゲームセンターなどではアメリカの雰囲気を楽しみながらも日本と照らし合わせながら楽しむことができた。例えば、日本のゲームセンターではクレーンゲームなどのゲーム機やプリクラが主流だが、アメリカのゲームセンターにはパターゴルフ場が設備されていた。ゲーム機も少しはあったが、圧倒的にゴルフ場のスペースのほうが広く驚いた。騒音はなく落ち着いた雰囲気で、日本よりも利用している人の年齢層が低く小さい子もたくさんいた。また、Laser Tag というレーザーガンを使ったサバイバルゲームも体験した。一種の遊園地のアトラクションのようでとても楽しかった。規模的にも内容的にも日本ではできない、貴重な体験だった。

もちろん楽しい経験ばかりではなかった。ショッピングモールの店員と会話をしたとき何を話しているのか全く聞き取れず何回も聞き直したり、適当に返事をしたりしてしまったことが何度かあった。自信があったリスニング力でつまずいたことが本当に悔しかった。これから世界に出て通用する英語力を身に付けて、将来の夢につなげたいと強く思った。苦い経験ではあったが英語が好きだということと、将来の夢を実現させたいという気持ちを再確認できた。アメリカで過ごした全ての瞬間が自分にとってプラスになったと思う。この研修に参加できて本当に良かった。

【オレゴン研修を終えて】

大垣日本大学高等学校２年　桑原　桃花

《My　homestay》

私が５日間ホームステイさせていただいた家庭は、今年の春にアメリカから訪れた派遣団の中の、私が受け入れたバディの家庭でした。アメリカは 15 歳以上であれば車の免許が取得できるので、バディの運転で色々なところに連れて行ってもらいました。ショッピングモールや、映画を見に行ったり、サタデイマーケット、パンプキンハントに行ったりと、アメリカならではの体験をすることもできました。日本で交流があったアメリカの友達と出かけることもでき、ホームステイ中に訪れた学校で友達ができたり、この５日間で沢山のかけがえのない思い出ができました。

《Through this program》

この研修に参加する前は、英語がネイティブの方と関わる機会が少なく、自分の英語力、コミュニケーション能力を試すことができませんでした。この９日間で、ホストファミリーと日常的な会話をたくさんしました。基本的な挨拶からはじまり、最終的にはバディと会話が弾み、お互いの好きなことや将来の夢などについても語り合うことができました。

また、研修中に訪問した学校では、同じ年代のたくさんの高校生と交流し、趣味が合う子、面白い子、日本の文化にとても興味を持ってくれる子、さまざまな生徒との出会いがありました。私たち派遣団は、アメリカの文化に強い興味を持ち、この研修に参加しました。同時に、日本の文化を発信したいという思いを持って参加しました。そのため、アメリカの人々が私たちの国について興味をもってくれたことや、自ら先行して日本語を学んでくれていることがとても嬉しかったです。

また、この研修を通じて、相手に伝えようとする気持ちの大切さを学びました。私の英語は完璧ではありません。ですが、相手に伝えたいと思う強い気持ちを持ち、自分が一番伝えたいことを伝えようとすれば、アメリカの方々はそれを汲み取ろうとしてくれることに気が付きました。自信がなさそうに話して、声が聞こえなくてコミュニケーションが取れないなんて、とてももったいないことだと痛感しました。その結果、私は誰と話すにも、自信をもって、まるでアメリカ人かのように感情を豊かにして話すことを意識しました。そうすると、「君面白いね、君の英語はとてもいいよ！」と褒めてもらえて、本当に嬉しかったです。

この研修に参加した９日間は、私の宝物になりました。同じ年代の高校生たちと交流を深めることができ、アメリカの文化をたくさん体験することができました。外国の文化に興味を持ち、肌で触れて、様々なことに挑戦することは自分にとって本当にたくさんのことを得ることができます。私は将来、仕事で英語を使いたいと思っているので、これからもたくさんのことに興味を持ち、将来に向けて歩んでいきます。

【ホームスティ“EXPERIENCE”】

岐阜県立大垣北高等学校２年　小竹　若菜

‘My Second Family’私がこの研修を通して得たとても大切なもの。サウスユージーン高校に迎えに来てくれた私のホストファミリーは初めて会った時からとても優しかった。バディの Zoe は日本に来た時から英語を話すスピードがとても速く、きっと家族も早口なのだろうと心配していた。そんな私の緊張をほぐすため、彼らは出来るだけリラックスした会話を促してくれたのだ。

初日の夜には、Zoe がオレゴン大学 VS コロラド大学のアメフトの試合に連れて行ってくれた。ちょうど日本ではラグビーが盛り上がっていた時期だったため、それと似たスポーツを実際に間近で観戦できたことがとても嬉しかった。ルールはよくわからなかったけれど、約６万人を収容できるスタジアムの熱気と盛り上がりに圧倒され、その場に居られたことが楽しかった。

休日にも、様々な「アメリカ」を感じることができた。土曜日には、Zoe と Zoe の大学の寮のルームメイト Katie が１日私に色んなところを案内してくれた。ふたりが通うオレゴン大学は色んな州から生徒が集まるアメリカでも名高い大学で、Katie もカリフォルニアから来たそうだ。前日に皆と見学したところだけでなく、大学の生徒でないと入れないような場所にも連れて行ってくれて、大学に本格的なトレーニングジムや 25m プールがあることに驚いた。大学近くの歴史博物館にはアメリカの歴史が展示されており、紀元前まで遡ったアメリカを知ることができて良かった。

午後はダウンタウンに移動して、Voodoo Doughnut に行ってカラフルなドーナツを食べたり、サタデーマーケットに行ってたくさんのトレード商品を見て楽しんだりした。祖母にあげるドリームキャッチャーを買うと、スーツケースに入れても壊れないように丁寧に包装してくれた店員さんがいて、その優しさに心を打たれた。その後、ゲームセンターバーに連れて行ってもらった。慣れないゲームに戸惑う私にわかりやすく遊び方を教えてくれて、一緒に楽しむことができた。初めて Shirley Temple というノンアルのカクテルを飲んでみて、日本にはない甘さだと感じた。夕方連れて行ってもらったモールには Spirit Halloween といういかにもアメリカらしいハロウィン専門店があった。可愛らしいコスチュームというよりは、よりリアルさとえぐさを求めた商品が多く、店内はまるでお化け屋敷だった。日曜日はファミリーデーだった。仕事やスポーツ、習い事など、毎日忙しいにも関わらず、私のために時間を作ってくれた。日本ではなかなか機会のない Jack-o’-lantern 作りを体験したり、ナイキストアやユージーン産の物がたくさん売っているショップで買い物をしたりした。その夜、ホストファザーがご馳走してくれたローストビーフはとても美味しかった。広い庭をライトアップしてくれてパーティ気分でディナーを楽しんだ。

５日間という短い期間の中で、私が触れた優しさとおもてなしの精神は計り知れない。毎日のように私を笑わせてくれたホストファザーがいつも口にしていた、“Experience!”という言葉。その時はただうなずくだけだったが、帰国した今、それはきっと私へのメッセージであったのだと思う。ホームステイ中、とにかく何でもトライさせてくれたホストファミリー。そこに込められた「どんなことにもまず挑戦」というエール。この言葉を忘れず、今後の人生におけるモットーとして大切にしていきたい。そして、必ずオレゴンに戻っていきたい。…第二の家族と交わした「再会」という約束を果たすために。

【ホームステイ】

岐阜県立大垣北高等学校２年　澤　はる香

私にとって初めてのアメリカ訪問、ホームステイ。一生の思い出となる素晴らしい出会い、体験、機会を与えていただいたことにとても感謝している。私のホストマザーは沖縄出身の日本人の方だった。姉と弟、両親の４人家族であり、ホストファザーはアメリカ人で、ホストシスター、ブラザーは英語と日本語両方ペラペラに話すことができた。

ホームステイ初日、とても不安で緊張していたがそれは一瞬のうちに消えた。その代わり、強い憧れとかっこよさに惹かれた。とても温かいファミリーに迎えてもらえ、たくさんの経験をさせていただき、一緒に過ごした日々のすべてが私の宝物だ。その中でも特に心に残った、私の価値観が変わった２つのことを書きたいと思う。

１つ目は家族愛の強さだ。アメリカに行く前からアメリカ人は家族思いの人が多いということは聞いていたが、実際にホームステイをしてそれを痛感し、またそのことがいかに大切、幸せであるか実感できた。朝７時半、夕方６時家族そろって朝食、夜ご飯を食べ、その日あった面白いことや、友達の話、たわいもない話を家族みんなで楽しむ。夜はテレビを一緒に見たり、将来の夢、大学についてみんなで話し合ったり、とにかく家族の時間をとても大切にしていた。休日はオレゴンコーストに連れて行ってもらい、コテージに祖父母と家族４人、私の７人で一泊したときには祖父とホストファザーが夜食、朝食を作ってくださり、日本とは違い、男女間で家事の押し付けがなく、手が空いている人が行うといったお互い助け合うという姿に感動した。

２つ目は豊かな生活、日々を送っているということだ。ホストマザーが日本人の方だったため、

その分たくさんアメリカについて質問することができたし、たくさんのことを教えてくださった。その中で、日本は先輩、後輩など上下関係が厳しくあり、残業も当たり前であったりなど、日々プレッシャーが多く、ストレスも多い。しかしアメリカは上下関係がほとんどなく、ほとんどの人が定時で家に帰り、家族との楽しい時間をゆっくり過ごす。その分、朝７時半から仕事を始めたりなど朝を有効活用し、効率的に仕事を終わらせる。休日は家族で旅行やショッピング行ったりなど、自由で日々を豊かに過ごしていると感じた。一度きりの人生。自分の生活を改めて振り返り、考えるとても良い機会となった。

この研修派遣を通して実際に自分の目で見て、耳で聞き、体験することで多くのことを学び、視野を広げることができたと思う。もっと英語を話せるようにしてもう一度オレゴンを訪れ、さらにアメリカについて学びたい。また今回経験したことを広げていきたい。

【ホームステイ】

岐阜県立大垣北高等学校２年　高木　結那

〇アメリカでの生活

　私にとって、ホストファミリーと過ごした時間はとても貴重で、忘れられないものになった。４か月ぶりのホストシスターとの再会に、不安な気持ちも多少はあったものの、めったにないアメリカでの生活が楽しみで仕方がなかった。

　ホストファミリーとの生活は、新しい発見の連続だった。家には大きな暖炉があり、ホストファザーが毎朝薪をくべてくれた。ホストファザーはとても気さくな人で、いつも私の事を気にかけてくれてとてもうれしかった。ホストマザーは私をいろいろなところに連れて行ってくれた。アメリカのコストコに行った時には、大きさと量と値段が日本と全然違って驚いた。オレゴンにある動物園に行った時には、園内がとても広くて、日本では見たことのない動物がいたり、日本では考えられないような近さで動物を見ることができたりして、とても面白かった。

　私がアメリカに行って一番驚いたのは、食文化の違いである。ホストファミリーに、食べることが大好きだと伝えると、私にたくさんのアメリカンフードを体験させてくれた。パスタ、ハンバーガー、ピザ、ケーキ、ドーナツなどすべてが大きくて、そしてとてもおいしかった。

　中でも一番印象に残っているのは、ホストマザーが長い時間と手間をかけて作ってくれたローストチキンで、家族みんなで集まって、マザーに感謝を伝えながらおいしく食べた時間は忘れられないものとなった。

〇日本との違い

　私はこの研修を通して、アメリカ人は自分の個性を大切にしていると感じた。実際に私のホストシスターの髪の色は青色だったし、学校にはいろいろな服装や髪型の、肌の色も宗教も違うたくさんの人が交じり合って生活していた。日本は協調性に重きを置き、それぞれの個性が目立つことはあまりないように思われる。アメリカの人たちの、アイデンティティを大切にする考え方はとても素敵だと思った。

〇これから

　私はこの研修中に、自分の英語力のなさを痛感した。ホストファミリーの日常会話はとても話すスピードが速く、聞き取れないことがほとんどであった。時にはスマホの翻訳機を使って話しかけられることもあった。また、自分の思っていることが上手く伝えられないことがとてももどかしかった。だから、これからもっと熱心に英語を勉強していきたい。そして、この研修に参加することを決めた時は正直迷いがあったけれど、この研修に参加できて本当に良かったと思っているので、これからも新しいことにどんどん挑戦できる、積極性のある自分でありたい。

【ホームステイについて】

岐阜県立大垣北高等学校２年　　髙橋　拓海

チャーチル高校にて私はホストファミリーに温かく迎え入れてもらった。６月に私はホストファミリーとして彼を迎え入れたので再会にうれしかったが、言語も生活様式も全く異なる環境での５日間の生活が始まると思うと少し緊張した。しかし、ホストファミリーのみんなが私に優しく丁寧に接してくれたおかげで緊張はすぐにとけた。John 君やホストファミリーとの思い出をすべて話すにはここでは足りないので特に思い出に残った３つの出来事を紹介しようと思う。

１つ目はショッピングモールに遊びに行ったことである。そこでは John 君と友達４人と私で映画を観たり買い物や食事をしたりした。大人数で行ったためとても賑やかで楽しかった。どの子もとてもやさしくて面白く良い個性の持ち主ですぐに仲良くなることが出来た。映画の前や歩いているときのたわいもない会話がすごく楽しく全員が常に笑顔だった。行き帰りの車の中で音楽に乗りながら騒いだこともすごく印象に残っている。

２つ目は休日に歩いて買い物に出かけたことだ。その日は私も John 君も昼の 11 時近くに起きた。軽食を食べてすぐに、私のお土産を買いに行きたいというリクエストに同意してくれて 12 歳の従弟を含めて３人で歩いて買い物に行った。アメリカの街並みを堪能しながら遠くまで歩きいろいろな店を回った。途中で有名なドーナツやサンドイッチをたべ、とても美味しかったのが印象的だった。その日に突然私がお土産を買いたいと言ったにもかかわらずわがままを快く受けてくれ、たのしく連れて行ってくれたことに本当に感謝の気持ちでいっぱいだった。また、その夜ご飯には家族とピザパーティーで満腹になるまで食べることが出来てすごく幸せだった。

３つ目は、一緒にショッピングモールに行った友達の一人である Kendrick 君の家を訪ねたことだ。少し外れたところに位置する家だが広くきれいでトランポリンやブランコなどの遊具がある庭までついていたことに驚いた。放課後であったが楽しさのあまり遅くまで遊んでしまった。夜ご飯にナンと２種類のカレーまでごちそうしてもらい忘れられない思い出となった。特に印象に残ったのはこれら３つであるが、ほかにも多くの良い思い出がある。

ホストファミリーと一緒に過ごした中で様々な文化の違いを発見することができたし、積極的に会話をすることが出来、多くのことを学べた。また、文化は違えども現地の人と同じことで笑ったり驚いたりすることが出来たのですごくうれしかった。アメリカでたくさんの人と関わり素晴らしい時間を過ごせたことに感謝したい。またいつかアメリカを訪れたいと心から思える体験だった。

【ほーむすてい】

岐阜県立大垣北高等学校２年　鶴田　勇貴

　アメリカに行く前、ホストマザーから送られてきたホストファミリーの写真に、どう見ても同い年だとは考え難い、見た目が 28 歳のギタリストのような、ホストブラザーのジャックが写っていて、これがアメリカの高校生か、と思いつつ、ワクワクいっぱいでホームステイへと向かったことを懐かしく思う。

　会ってすぐわかったことは、ジャックはすごく日本語がうまいことだ。そんなジャックとの会話では僕は英語で彼は日本語を使っていて、なんだか不思議なものだった。ホストファミリーとの休日、お母さんとジャックと砂浜で馬に乗った。とても美しい海と山を突然暴れだす馬と一緒に満喫できた。途中からはロデオだった。そして、夕方にはジャックの車で二人で映画を見に行った。日本では年齢制限のかかる、血がいっぱい出て首がたくさん飛ぶ映画だったが、小学校低学年くらいの兄弟がお父さんに連れられ見に来ていて、そこでもまた、文化の違いに驚いた。その帰り道に、ピザ屋に寄ってから帰る予定だったが、途中で車が走らなくなってしまった。するとすぐに、ジャックは助けを求め走って近くのレストランから帰ろうとする、いかにもこわそうな煙草をくわえた黒人の男性に助けを求めた。僕は内心もっと他の人いるだろうよ、と思った。だが、その人は迷うことなくすぐに助けてくれた。また、僕のことを見て、「アメリカを楽しんで」とまで言ってくれた。見た目で判断することはいけないと強く思った。その後 30 分ほど修理をしたが直らなかった。その日は車を置いてお母さんの迎えで帰った。あくる日、ジャックはカーショップで車を買った。ホストファミリーは僕だけではなくあの一週間で新たな車まで受け入れたのである。このように日本では考えられないことが次々とあって、衝撃、悲劇、感激の連発だった。

　ホームステイを通して、もっと英語を話したい、もっとアメリカを知りたいと強く思った。次ジャックと会った時に不自由なく英語で話すために、自分の夢でもある海外で活躍する人間になるためにもより一層英語を頑張っていきたい。

【ホームステイ】

大垣日本大学高等学校２年　中井　まや

６月に我が家にホームステイしに来たカマヤとの再開。久々に会い喜んでいた私のことを、カマヤは日本語で「まや、久しぶり！！」と言って優しくぎゅっと抱きしめてくれました。それを見たお父さんのルイスも微笑んでくれました。そのおかげか直前まで感じていた不安が一気に吹っ飛び、再会の嬉しさとこれからはじまる５日間の生活のワクワクがより一層高まりました。

デビル家にホームステイをして沢山のことを経験し学びました。

私のファミリーは家族全員がヴィーガンでした。ヴィーガンとは動物愛護の為に、また健康志向の為に肉や魚は勿論、卵や乳製品を一切口にしない菜食主義の人々のことです。私も５日間はファミリーの一員なので皆と同じようにヴィーガンの料理を食べたり、お菓子を食べたりしました。例えばタピオカのミルクが豆乳だったり、ピザの上にのっているサラミが大豆からできたものであったり...。しかし、私たちが普段食べているものと変わらない味で、とても美味しかったです。外食をした時には、ヴィーガン専用のお店で食事をとったり、スイーツショップにはヴィーガンの人でも食べることができるような素材でつくられたスイーツが売られていたり、と驚くことが沢山ありました。ホストファミリーに聞くとアメリカにはヴィーガン専用のお店が多くあるそうです。日本にはまだそのようなお店が浸透していないと思います。民族、宗教、文化など様々な違いがある多国籍の国だからこそ感じられる特徴が分かり、「アメリカらしいなぁ」と感じました。

休日には、農場に連れて行ってもらいカボチャ狩りやリンゴ、梨狩りなどの体験をしました。ハロウィンの時期が近づいていて日本とは違うハロウィンを楽しんでもらいたいというファミリーの提案でジャック・オ・ランタンをつくりました。生まれて初めての体験でとてもワクワクしたし、作り終わりロウソクを灯した時の灯りの綺麗さに感動しました。アメリカの文化に直接触れることができとても嬉しかったです。他にも私が好きなカフェ巡り、放課後には映画館にも連れて行ったりしてくれました。

楽しい時には家族みんなで笑い、色んな話をすることが出来ました。ホームステイをした５日間だけでも本当の家族になれたと思います。これからもずっと連絡を取り合って、大学生になったら必ず、また彼らの元を訪れたいです。

私は今回の研修を通してアメリカに行く前よりも成長できたと心から言えます。実際に行き現地の人々と積極的にコミュニケーションをとることによって学べることが多くありました。この体験は私の宝物です。

これからも積極的に色々なことにチャレンジしていきたいです。

【ホームステイ】

岐阜県立大垣東高等学校２年　山﨑　未朝

私にとって初めてのアメリカ訪問、初めてのホームステイはとても充実して学びのあるものだった。私のホストシスターは以前私の家にホームステイに来ており、その後もSNSやメールなどでやり取りをしていたがホストシスター以外と話したことは無かったのでとても不安な気持ちでホストファミリーと対面した。元々知っている人ということもあり、始めからフレンドリーに家族のように迎え入れてくれてとても嬉しかった。

１日目は日本食のレストランに連れて行ってもらった。寿司を頼んだら日本の寿司とは少し違っていて白米ではなく赤飯であることやホストマザーが頼んでいた天ぷらは日本でもよく目にするえびの天ぷらやさつまいもだけではなく、チーズケーキなどの日本では目にしないものもあってとても面白かった。そのあとフットボールの試合に連れて行ってもらい、みんなオレゴンのＴシャツやパーカーなどを着て応援していてその迫力に圧倒された。

週末は色々なところへ連れて行ってもらった。かぼちゃ農園や海などオレゴンの豊かな自然を体感することが出来た。水族館やショッピングモールにも連れて行ってもらい、日本との違いも見つけることが出来た。アメリカでは多くの人が犬と一緒に海に来ていたり犬とドライブしたりしていて、日本ではあまり見ない光景だと思った。ホストファミリーは出かけた先で話したことない人にも質問したり話しかけたりしていて、日本とアメリカの国民性の違いを感じた。

私が特に印象に残っているのはホストマザーにリュックサックが買いたい、と伝えたら買いに行こうといって、ナイキやショッピングモールに連れて行ってくれてそれでも欲しいものが見つからなかった時に他の人に「どこかいい場所はある？」と聞いてくれて何店も連れて行ってくれたことだ。時間も労力もかかるのに、私のために動いてくれてホストマザーの優しさを感じることが出来た。他にも沢山ホストファミリーに迷惑をかけて「ありがとう、ごめんなさい。」と伝えたら「家族なのだから助けるのは当たり前だよ。」と言ってくれて本当の家族のように思ってくれているのが本当に嬉しかった。

家でご飯を食べるときなどに私の言いたいことが中々伝わらなかったりホストファミリーの言っていることが理解できなかったりしたが、ジェスチャーや辞書などを使ってコミュニケーションをとることが出来た。これからもっと英語を勉強してホストファミリーに会ってもっと沢山いろいろな話がしたい。

今回の研修に参加してホストファミリーのような素敵な人に出会えて、とてもよかったな、と思う。また、これからも色々なことに挑戦したい。

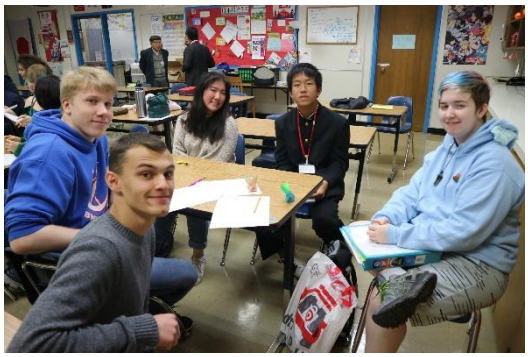
オレゴン大学

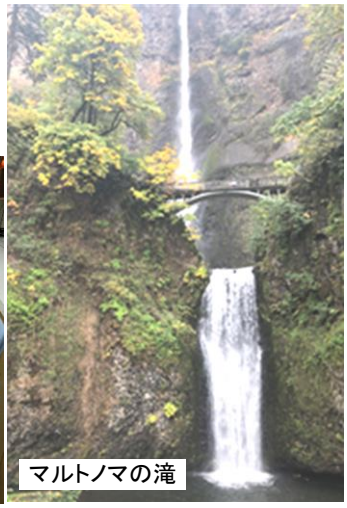
ビーバートン市役所

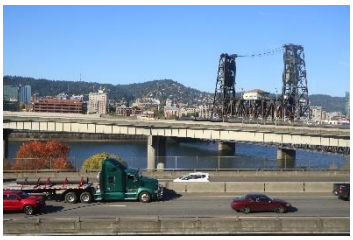
チャーチル高校の鈴木先生

デニー・ドイル　ビーバートン市長

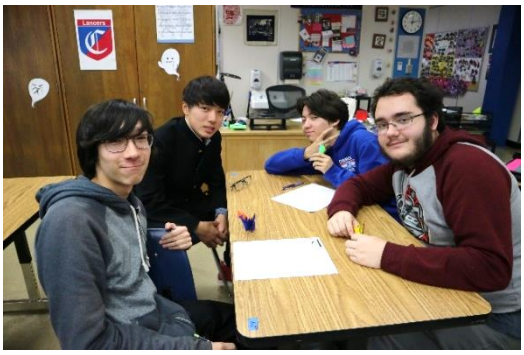
シェルダン高校の塩谷先生



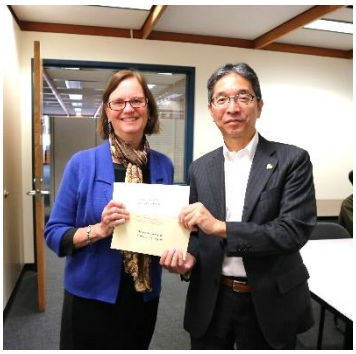

マルトノマの滝

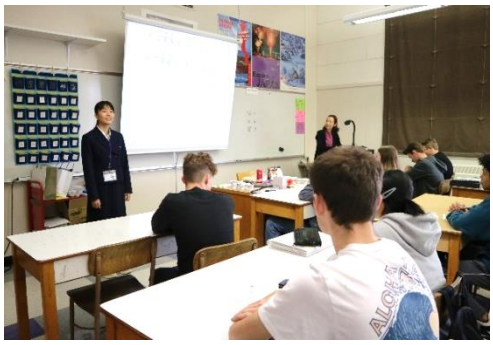


ルーシー・ヴィニス　ユージーン市長



ナイキ本社





小沢先生とサウスユージーン高校の先生方

【第４回 大垣市高校生アメリカ合衆国オレゴン州ビーバートン市、ユージーン市研修派遣報告書】

編集　公益財団法人　大垣国際交流協会

大垣市室本町５丁目 51 番地　スイトピアセンター学習館２階

TEL 0584-82-2311

URL http://www.i-oiea.jp

発行　令和元(2019)年 12 月